みの國住吉郡

下

3589
米子市立米子図書館蔵書印

藤本文庫

義濃の歌つゝき野孫下の歌

風雅集

春歌上

兼久元年百首歌合小野篁俊

順徳院御製

夕ばえく日ゝすゝむまゝよゆく人の袖ふる小笠ゝ春風ぞふく

下の句白き春風の袖を吹くなる小野人の笠のこゝろ

さ夜ふけぬべし。そゝ。ぬらぬ。ぬれぬ。笠ゝ春風のふく心

ゆべきふあるべし。

後京極殿改定大臣家百首歌合

雪ふかき夜

定家卿

初瀬山うづもれぬべき雪ふかし谷の木の葉の
落のこれる

百首歌中に　順徳院御製

ちぢの方川雪ゆくみなぎりていくの里はしら波

雪の夕　後京極摂政

雪のあけぬ暮ぞ雪ぐ雪ふるとこぼすなりけり

こぼれくるかぜにいかにいかにいかに花のうへの雪かな

いくれがゑをぞなりぬ

新しら波

定家卿

雪後の月

雪ふるゆくかたの月のかげもまたまつ山のまくら

雪中

題しら波

雪ふるまつ山ぶかしかぜもなしなみ

雪ふるまつ山ぶかしかぜもなしなみ

雪ふるまつ山ぶかしかぜもなしなみ

いつもたてしまつのうへのかぜもなしなみ

雪の白さ櫻ものるしらなみ

春歌下

水上落花　　従三位頼政

くらし野川瀬の流れにまかせやまた根からに絡にきゆる所せし
花白き花のちりかゝるをみれば花も亦きゆるやうにみゆるなれ
今はよし野川に流れくる吉野まか根が筈よし消ゆくやし
見ゆる所せしとなん。

夏歌

千五百番歌合に　　宮内卿

すゞしらぬ里をもよそにしてつ夜のうち添ひをあらずやまさ

なき名は常に落おもしろく露にさみだれの山ちる玉川の里にかゝるを
千里に出てる時に世し半ば同じ趣なるよや。

夜ふかきの中に　　後京極摂政

あやめふく軒の雫に散るまじくもあやめかりすが夜更しの月
すずるとは宿にまそいふべき軒をかきいふべくをすゝめれば。
あやめふきやもさ軒をかきしばしてもつりひとしきまふのかげ
をみなくる影の露を軒ともいふべきそれなくすが夜
やしいはするも詳なるし。又五月のよしもなくてしもかに
菖蒲もかくしいふ草のゆかれならし。宿はまことはいひ。夜とはれ
いへれど五月雨をかきてるといふなれば又日にかなへるあや

多の詠りてまゝべられぎ。元雅又雅ちらじうし。

秋部上

後京極摂政太政大臣家百首歌合に獨暑

定家卿

秋来ても猶ゆふ風をまつ蟬の声すきし陰ぞたちうき

歌しらず

山ざとの八幡の森の蟬の声秋うけてなほとまの柱の下をふるつまの

蟬の多くもかの柱の多のあつるく

恋歌三

後京極摂政太政大臣家百首歌合に六百番歌合より

寄風恋

志らざりしあはぬ海ぞ風の吹もせぬ自然うゆくき秋のこゝろハ

袖に白ものむくしし自然ふかしてゝ袖ぬるゝしぬき涙ハ

ふく風をもまちぞるしし。　三の句をぬぎを水ぬを書誤を

るゝさかしらぬ改めるゝ吹ぬ風のちるも身ものしして。

をゝゝゝ。ぬぎうて八方えぐゝし。　ぬの句を自然のまゝ

ぬ風も吹うめきゝのおのるゝて。をを入るゝて今ハあぬ

うゝきゝゝし。　詠旨ハ秋ぬなめてゝゝ人のゝ

秋夕の詠

恋部

遇不逢恋

宮内卿

ひさかたの月の都の中空に風吹きまよふ雲の上の月

二三の白雲恋死恋死すべし

ふたのまに物思ひ月をながめしに　ひとの白雲同じ空の月

見るかたにまがふ雲の上の月

数ならぬ身にも同じ空の月を

数ならぬ身にも笑ひ顔なるとも

新古今上

雅経

宮内卿

霞こめる春の日ながらひぐらしの

なきて八嶺の松の夕暮

ひぐらしの鳴く夕暮の

あるかなきかの人の

ひぐらしの鳴くなり

ぬぎすてし衣の

新歌下

建保三年内裏百首

○以下底本欠落の部分は新古今和歌集により補う

哀し海の道にかゝる夜の声やいはずもがな志らぬ倭歌の 集
むかし万葉にみえたるの声とハいへどもいはゆる人
をさなき事をしもなし
毋子が思ひに侍りけるがゆゑ 初めの山乃中堂にこもりて
侍りけるに夜更のいみじくすみわたりけるをきゝて文字の
七とせもおほつかなき事にあらずしておくに事をさせ給ふ
ころや言にすゝみける山のおくのゝ夜のかなしみんへ
おく??なりけれし
うらも絶ぬ風のうへの様にすくらみやこの夜まつりけるころ
二三の句山の嵐の音にあらしのうへといふ事也 秋の夜もも

京にてハ文字の山のおくふかくこもりて見ける夜也 より風
出し嵐のうへをたのみてはや嵐のうへを渡りてゆくとなり
下の句より初句へかへしの事ハ歌を詠しとおもひおこせ玉ひし
夜まて入月を文字のかたはらにかなしく思ひやりけるか絶夜
見えずなりにしものならひとしてこそ又嵐をきゝしきに此
たぐ猿なける夜にいとゞ猿のきぬをとるもおそろしき

新千載集
春哥上

建保三年百首合ふ野外春風　雅経卿

春日野はしもとのもりの春の色を衣にうつすみのこずえ風ぞふく

なに人か春日野の春の色を衣にうつすみのこずえ風ぞふく

春ゆくすがたも春の衣にそをまとはるかすみもまとはる　一そ

のそら春の春を春風の吹こそ風ふかぬ春のゆくすがた

神のまもる春の孫のすがたこそ春のゆくすがた

なるやうに　なに人の袖のそこびなそのまに用いくそこを

たんぬるとくに引くくるびとくくちなるも　下句袖をとくくちふ

花やうなれどそこにあるとこそほのうすくおぼつかしかぞちけ

乃人のかぎすがたをまねびくきくんみそえもいるぬひが

こゑ〻をなりぬべき。

帰雁

繋るもおもかるくかぎふ風ふのばうくそもそそしじまのうめが枝

初白父事をこそ繋ものおもく。　二三の白ハ秋ふなるもふぶといつまこ

なるをうくみとらそそ料ふかくいつり。　うくみそ帰り

ゆくまこの雁を知をうくそそくそふうそいつるく。

そそしじとそ今ふうくみくそむきしぬるとも秋ふぬそふ文事ま

かくくもつべればうくまそそく。

春二奇下

元久二年詩哥合に水郷春望

宮内卿

うすくこきやまのすその霞引わたしむらしも見えし志がの里を
初二句は指きさすに小波やあさうすのうすは色をみえしして霞にも
びきさうすの木ずゑもふかしとある哥をこゝろみるを。此の句を霞の
うへぶかく。まさくゆるおとめて。岸のこずゑ。いとゞまさるやうに
思ひやらるよし也。たれびきの引き。うすきの緑色。今を
うすきこきまた歌は。うすきはひずして。霞のなれ引よし。

又百番歌合あり

本歌も目数がのみを水底ひまて花ものことぬまきれにむすまで

桜花本歌も。今は花みをやしきかぬさけれはせずとも目数
のみなきるぞのりぞ。本歌の余情むかふらむ。

秋歌上

月前秋風

後鳥羽院宮内卿

まどろまぬ床のまくらしろく月さえてあかしぬもまたはらふ秋風
ぬるもじ二つあり。

羇旅歌

建仁元年五十首哥奉りけるに 雅経

[illegible]

[illegible]

[illegible]

のめぐりあひぬるかな

題歌一

後鳥羽院[illegible]百首歌中に

思ふこと[illegible]人[illegible]れ山ろ下ふる風の[illegible]

四位法師

題歌三

六百番歌合ニ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○天陽の[illegible]

定家

琴の孫もかのごとくつたへて弾とて弾ずべの撥の中も弾ずべきを
初二句をかなかぶ弾とまぶ歌をくつ弾琴のまでもるべ
人のまねべきやとなるふべぶ歌をくつ弾琴のまでもるべ
ひつるをもたとなるべ琴をうつて弾をきく
あもいで歌をくつる中とん。をぐで、琴の弾ん。ひなをぐで
やいひとく又中も弾ずをといひぶ歌ぶ中もあるといを
料ぶをぐでの撥みとへいるあるべをぐでをと牧いでそのうく
中弾ぶをふうて歌をくつれをめいべれ歌をくつ

を感笑とて中の弾をるといでをひて学面。

後の撥弾下弾

凱しの歌

ひの色ふるかんやしらぬ笑をもてあやのいろあしへ人のうらひ弾
中弾ぶをもねの歌のいろあしうつねぶおもふ何のまぶ
ふぶをうたる。 初句は通弾のうたをひて。 二三句の白
ハ意しきへ人を。笑をえをもんかやしくうをんをもしらぬし
て。笑弾をうをを意をく。弾をせぬくしをはなをふうく
たを弾をを歌のいをひるあるをもて。うくいひぶたをもて。平意ハ
で弾ぶれぬふるかて。笑ふをんぬしへ。 弾句意しきへ
ふを意をうて弾ぶの笑のかをひをなると。

為文賀歌

建仁二年和哥の所にて千載集を撰ばるる

何の屏風に

高倉中納言

若山の松をこめぬる雲のなかに年ふるそとのひのつもりをぞしる

袖二首ばかりに和歌所にて撰ばるる花山の遍照僧正の頃

あひし例ふるまいふ　雲をも松をもぬるさらひ

ふるとしの道のそとしいとを料に　ほの白の頼朝卿の

そとの年へにけるまひしくひ度賀を詠ずるふるとて

ふるの道のそとのくとへてるもしし

新拾遺集

巻第

建仁元年鳥羽殿にて合せし山路部

定家

ほとゝぎすなく山の末ふかなれとまつ時ぬれは雲のうへ

二三日の白雪ふるあしひきの山のたをりに鶯ぞなく

ぬれぬれは山の末にとあれ詠をぞれめ　法自無あり

きゝ分ぬ雲にとまるとなる

雨中郭公

後鳥羽院御歌

[illegible]

秋二首

秋の[illegible]　家隆

[illegible]

野原

[illegible]

順徳院御製

[illegible]

霧籬　二首

[illegible]

二の句、衣をきそしとそ衣をきそしとをかけてうるそしめし
も衣の袖く。この句、今日云るとらひけるとをかけたる。
ひのうるほのしれぬとせんうるし。花ずるとよ、梅をふ
むとうく、猿名を萩のうあの名ふ桜をいつ。一そ八人やこを
ば歌とうもふうもしうぞうのもけり。

衣傷 弁

一日一条

末の露涙ぞかたくをしつるわが袖のしら露
袖二句、歌末の露涙の事やうの世の世九くも

秋部

[illegible]

[illegible]

春の事ふ[illegible]。下句、[illegible]秋ふあるね
どのうをふく世の世九くもるとをとへばしら露ひ
うを秋のぬくらぶ物のうふきとも。対句よ、[illegible]
合をうくもあり。又下句、後の[illegible]をもうをせうをも。

後を[illegible]ひうの[illegible]法法ふうて

順徳院御製

同じ世のわれを秋ぞ老のぞうゆく月のよ我の形ふん
うを秋を[illegible]部の月ふ[illegible]波と伝渡と。
をるのふふをもを秋[illegible]ましての波うのれをもばやを

より別れてハおもかげしずしつきざれども、世におもしろしと見れど、聞
雲の内なりしにかくれさせ給へバ、同じ世ながらわかれ来つる、
相見ず、さりとてもまたおもしろしやしつれども、常に恋しのぞ
みける。 下の句ハ、月をいづこにても一つの月なれバ同じ世
此雲かゞしる雲井のよその月ハ、人る夜に思ひを恋々てさへずぞ
くもふれてし偲しく、父帝の御殿へと渡りずれバさもさ
こそその月を今も同じ世にあるに父帝ハ同じ世にもおなお
ハしまねてもかなしく思ふなしも恋ずよしもか
くあそれなる御涙なり。

恋哥一

光明峯寺入道摂政家恋十首歌合に名所恋

宮内卿家隆

かひが嶺に木葉吹しく秋風もこゝろの色をえやハつたふる

本哥 かひがねをねこし山こし吹風を人にもがもやこと

つてやらん 此歌よりよみ出たる趣なり。

木葉に吹しくとよみ入て、此句の色をかけ合せたり。本哥の二三句を

色ある木葉に思ひふきしけれども、秋人の緑をさそハず

しらえ吹つたへぬとよめり。

恋歌二

宝治二年百首歌奉りし時寄雲恋

八條院高倉

きえねたゞしのぶの山の峯の雲かゝる心のあともなきまで　〇玉

なかに命やもなふぞは雲のかゝるを云し。　玉にいはく

さらぬ心に露ふかき命のたえくるしき歳のとをきも。の強

く緋の玉へかくその露に縁語なし。死ねといふ事を

をきてぬきぬべしたゞいはらすらぬなり。　かゞの玉に

葉の花は人のあふれるも初めの玉のかなしさらず。　玉の葉に

うけても露は縁語なり。

かゝりても、初めの心下句の

ごゝろおもかしうへかへゝ命をまけてこそ毛ぞかし。

つらきは人の情らきなり。

恋哥四

光明峯寺入道摂政家恋十首歌合に寄雲恋

定家朝臣

ゆくゑなき花のかげ人の新もうしかゞまるまのうつりしやすらん

なかに年をへしものかげみとさるまへはこれはいかゞこちら

ぬ花の新のうつれるをよめり。　うつりやれきはいかゞやま

まことに新のうつれるをも称すなり。　此歌、恋のさこえず

えらびて花のさかえ。

恋哥五

同院摂政家百首哥に恋哥　定家卿

おのれのみこゝろのうちにつくるおもひしくはかなきことのなけきかな

三の句を伊勢物語にあるよのなかのひと

あるを用ゐて詠たるなり　下句は同條の本

文なりしくえに見るよしもなきは紅のいろのこそ

彼物語の詞を用ゐたるなり

神祇哥

　　西行法師すゝめ侍る百首哥に　定家卿

うきよにはいかにせんとかあまくだりしみえずよしなき神のちかひを

初二句は詠歌の道をいふ　下句は伊勢物語の詞を

世をすてゝ見しよの事をわすれぬるうきことなし

をうけたるなり。

釋教歌

　　如寒者得火　　寂蓮法師

花のみなさむしろにさえびえてあつきの数ならぬ（へ）流れ

初二句ハまことに物をいへり　三の句ハ撰出びまへく。
まこと其の水も新しと心ひ合せ　二もし雅故ハ其せあり。
歌を法華経の薬王品の文にて　経の新意を
たとへて歌なり。

雜部上

道助法親王家五十首歌に寄帰雁

雅経

かすみゆくよものこのめもはるばるしむかし山にかへるかりがね
きこゆしむかしにかへる歌なりかりがねの孫やつゞくさましつの句ハぶしやま山

なるにやといふ心にて雅経ハ花もまた山へかへるといふやうにみなくく
いふ文歌のさまのさまなり。

石清水哥合に月前霞　正三位知家

摂津の国あしたの山路の月霞のそゞいかにもかけ

歌に五月雨　家隆

玉のもしどろ打つのあやめ草さみだれながら行くいく末
五月雨をみとめて軒のあやめ打ちみだるゝ庭に落つる
玉のしどろなる花どあやめの露のしたゝりて
いふ風にあらはし文玉玉しどろに落る庭にあやめ
みかくるもしいへ歌ぞうつくしくもしどろなるをしあらはせ

いで。文武の昔とも此の句までにはゞかりもよしは。

歌のさまもうつりつゝ。

雑歌中

名所百首歌よみ侍りけるに　定家

まちわびし昔は今にしのばれてかくしきし川の流

此歌いづこにしもやかやかへ大伴のみつの後松かくれ

てひぬらん。今にも今にいひてるをかなり。取りんせ

昔見しときにもまちわびしといふに縁あるさなり。

久しきにも松に縁あり。

新後拾遺集

春歌上

建仁元年五十首歌よみ侍りける時　定家

なにはの海やそらよりかすみ坂の山もとの浦ら風ぞふく

此句いづ浦風を春にまたぬ霞やこゝかしこに春

風をあまほしきをとにとゝともあればぎんうる

さのさまぎなるべし。

千五百番歌合に　雅経

はやらぬ雲を春の花風にかすみあかぶるみよしのゝ山

にの白よりこうけあバ民こ絹ハ古きこゝろふなりなぐ風吉や
あるこゝろんこゝあやぐさるこゝやれまこゝろこゝ桂信ろく
まも流こるなるべし。

春歌下

百そこゝめやれしついぐこ　順徳院御製

花の色ふ桜をるこゝらぬぐざし北三梅のひぐこゝれ花のりくる
万世ふいまし人もあづごゝやこゝのむぐらかぐ
ちるこゝなく。　二の白ハ付表をしこゝぬこゝふ形　聖るこゝと
年こゝぬこゝをこゝ白こゝ花ゝ。　かざし桂原を三梅山

乃ゝぐこゝこゝこゝこゝこゝの世ゝ迄ゝ。　久ゝ春ゝかざしを折ゝ
ざこゝて後ゝ付ふゝこゝ。　一こゝの後ゝこゝ三梅山の花ゝ花
ふゝ民こゝて後ゝ付ふゝ白こゝ桂原ゝこゝを後ゝ絵こゝて後ゝ
めこゝしゝこゝ後ゝ中ゝ三梅山ゝ花ゝ桂原ゝのゝかざしを花ゝ折ゝ
て花ゝをこゝれゝかざ民ゝこゝふ形ゝこゝのゝぬゝくゝこゝもゝかゝこゝ桂原ゝ
る付ゝ民ゝをこゝこゝぬゝこゝかざこゝこゝれゝこゝ。

建保三年百首歌中春歌　定家卿

いこゝつじこゝいこゝでゝや海ゝこゝ志ゝこゝろゝ花ゝこゝの折ゝくゝをゝたゝづ折ゝく
む雲ゝ志ゝあゝづ山ゝ思ゝびゝこゝくゝこゝこゝ道ゝ中ゝこゝれゝくゝこゝこゝろゝ花ゝおゝくゝも
こゝんゝこゝべゝく。　いこゝでゝや民こゝこゝるゝな雪ゝ花ゝ二の白ゝ花ゝこゝこゝこゝるゝべゝこゝれゝば。

人のこれおくを薄ぬるにさせるうけ合もむつかしとなり。
深くぞ深しなどあらばんのおくにおしうけ合つべきるにや。

百首歌よませ玉ひける中に　順徳院御製

ももしきやふるき軒はの山は昔の名にしをすぢらぬ也つじ
ちがひの山前にりんせそれ字名雅の名にいひ
つけて昔のさまもよせむつる昔の色はまし。海じ
ちぬる心しかしぬはしじみに昔のさはなり。

九条前内大臣家三十首の中に述懐　後徳大寺

堀河院御時百首歌奉りける時述懐の心をよみ侍りける
宮く家つ

なか／＼にたえてしなくば小船うき人をも身をも恨みざらまし。
雲のかよひぢふきとぢよ中なる船をとめ
まくらにや。　三の句を昔の心しかしぬ横さて色やらぬなり
きてなかなかれらぬ譬の心さまふくめて聞じまきとふ事。

羇旅

名所百首歌奉りける時　宮く家つ
旅の雅の衣ぞ秋かぜすゞしくさする山の名れぞすずしけ
和歌所にて寄旅歌　後京極摂政
松まちて臥よぎのみなとのゆすゞ今もふかの浪まおもかげ風

よるのみちのの松ふ沖つ塩風のふくとうしよりあるやうに
ぞうなくてさあぢさひのきかのやうに後拾遺ふ月
うぎよよるのくも雲さうてさくとうしよ後恵法師
くあれどむぎうし迎てし。

秋部上

道綱母

さくらがかふふよりもふく春の雪ふるそうつろうむさぶの糸
初句次のまへいひかけそうつろうまぞくかきり。　康古今
ふ八唐とあり。れ若かくふぞうれとなるやいふまて。

むさぶ　はとはよみ玉つめ玉ん物ばかりてやそう。
ぼの白さ波のうちのうちめくれないひくまて唐の波やみぐ
を清らんとふふるそくそのうちまるるるぐまそ清そ玉ふ
のうろうひくるむさうし物ひいふまるべしうつろふ波のう
ぞ玉ふのうとをかれうるべし物ぐればかりまそ河へ。

名取百首　河内

初丁のうちまくうまうちのうれ春そぬぬうづくも秋さへくるも
二の句春時といひうきうち。　ぼの白八光盛社ふるたふ。
清ぬ玉ふ玉ぐし唐の事ぐけさそ波の春そふれふ秋
のうへゆるうへ唐の波さ春ふそも清とへだぐ。

○天徳乃古物ぐ物流下の中

建保三年[illegible]月　後朱雀女

思ひいづるよ嘉を一東のうつりゆきまでさてさてあれば神の月新
なから秋の神のうつりかしあるべこしあるべこし
むかしのうつりかしあるべこしあるべこしあるべこしあるべこしあるべこし
あるを秋の神八秋の神の花の様をうれはなよ思ふ
一東のうつりかしあるべこし東の花月
さ秋の東か今神べのうつりを見る神の霧八一東人かあハ
でよしけの神の波ふ紅ばそ東の花月をもるもどあ
ぶれる月新ふそ東の波を思ひいづるよ
題しらず
有家

きりぎりすなくなる野辺の忘草あれぬるかとみる月もすさん
きりぎりすなくなる野辺の忘草あれぬるかとみる月もすさん
ふるのもひすむふるやくしらず　孫白ずもむ安の深

秋歌

題しらず　[illegible]

東の松ふき東ふきゆく[illegible]
[illegible]の白ふ東の松山を波のこすゆ[illegible]
[illegible]の波ふ[illegible]
二三の白ふ東ふ[illegible]

○[illegible]

為尤朝臣家百首に小倉山月　俊成

秋の夜のふけゆくままにくまなきの月さへしらぬ山もそめ

寄月

名所百首に寄月　宮内卿

あさぢふの宿むらひの雲のまより明ぬるかとみしは松

初雁をむらひの浦の雲ぬけて月にぞ鳴わたる

百首うたのうちに　定家

たちぬるもあはれなりけるいにしへのしたるべ

雜秋歌

百首歌の内に　土御門院御製

立田山しもとぐりやもみぢしぬらん河波さゆる月の

寄月

建保二年百首歌の内に　定家

かくれ家は月ばかりぞ問ふべき杜の葉ばかりのこる

上白露あはれ消なば秋の夜の月をかたみ

かくれ家としの

おもひぐまなくとこそ

陸奥の国に会坂をあづまといふ。　ひがし二白ふ杜の孫ぐさ

にて下句ハうけ合これなり。うけ合ハ歌なれバよくよみつゞけて
あそびのとものまがりしにたへぬなぎさの言葉玉
みゆるとかくよみてみせしかる人もいへりき。

新古今百首に

あづさゆみいそべのうらに引あみのめにかけながらあはぬ君かな

上句ハ目にみゆる所なり。扨細かく浦ゞにおほけるに。
梓弓いそべの浦をしもよみたるハ引よ縁ありてあふせ
るゆゑに君がかなはぬよにもうた歌なれど今少しあまりに海
辺ふかくよみてうたへりなどたへなる事なかるべきなまし。

戀歌四

千五百番歌合に　　宜秋門院丹後

中〳〵にまことてはおもはずあふ坂の関越あれば恋ひしなるらん

これハ逢坂の関こゆるときハうれしかりしをみせて其の後ハ
恋しき歌ハあなかしこといへるいふ逢坂の関越なさるとハ（逢て後をいふ）
いまだあはぬ恋よりもまさりぬべき歌。

歌しらん　　西園寺入道前太政大臣

まつとせしむかしひさしき夕暮に面影わかる山の端の月

上句ハ人のまてはするもあらバまだこぬ人をまつらぬ
ひとりみるこの夕暮なるにやといふ言葉なり。

雜歌上

歌しらず　　家隆

さゝなみ　あふみの海　さゝなみの　波寄こぬ　知らぬ浦風

三位の白　年老ぬ　ゆくすゑ　なほ　おもひ　へぬ　ゆくすゑ　二の句

ゆくすゑ　白と合　まて　思ひ　ゆくすゑ　なほ　ゆくすゑ　神　ゆくすゑ

ゆく　ゆく　波の　ゆくすゑ　なり。

新續古今集

春歌上

水無瀬殿御歌合に今年はじめて春の日あらそふ

家隆

櫻姫のあまつ神やすがゝん　春の日ながき宮ばしの川

其の外の春ふかき　春の日ながき　宮ばしの川　櫻姫の　あまつ神やすがゝん

春の日ながき　宮ばしの川　櫻姫の　あまつ神やすがゝん

櫻なる　春ふかい　櫻なる　宮ばしの川　櫻なる　春ふかい

大うみ海の中に秋古今[illegible]

[illegible]

なるこ鳴ふかき物思ふ[illegible]

[illegible]

一つもさくあやめかな

後ふかくとしたかくとも海辺雪

[illegible]

秋白[illegible]

天はら[illegible]

[illegible]

春部下

河ゝ落花

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]百首歌合に雲雀　後京極摂政

かゝる岳の木すえもみつゝ末がくれ小野の百合はさかりなるらん

[illegible]白ばかりなる[illegible]の海を見れば出ぬる月ぞ[illegible]

[illegible]あぎやうふまる[illegible]

[illegible]

後小松院[illegible]人くれなゐ[illegible]

つゆくふ[illegible]孫子　雅孫々

むらさき[illegible]

[illegible]

[illegible]

いとゝ[illegible]ふるさとよりそ[illegible]

[illegible]

[illegible]

宮内省図書寮

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

俊朱つ女

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

建永元年七月三首合　後鳥羽院御製

波きよくて海きよくすめる月のかげ　山の秋ぞうつもしき

海さへ波の色なれる山の秋ぞ　海にて海さへ波の色

三の白ゆきぐし　波のうへ海くもるまぐもん　秋さへ人のこころの

秋ぞ　海さへ波の色なれる山の秋ぞ　海にて海さへ波の色

むらくもの　山の秋ぞ　山の秋ぞ　海にて海さへ波の色

後京極摂政九首合　宮くもつ

人くもの　ぐし　橋　ぐし　橋　ぐし　橋　ぐし　橋　ぐし　橋　ぐし　橋　ぐし　橋　ぐし　橋　ぐし　橋

二三の白　波　又　あさぬ　月　白　波　白　波　白　波　白　波　白　波　白　波　白　波　白　波

の　月

いまさらの通路　ぐし　ぐし　ぐし　ぐし　ぐし　ぐし　ぐし　ぐし　ぐし　ぐし　ぐし　ぐし　ぐし　ぐし　ぐし　ぐし

ぐし　ぐし

夏部

[illegible]

俊宗

[illegible]

秋部上

百[illegible]

俊宗

[illegible]

秋部下

[illegible]

俊宗

[illegible]

[illegible]

[illegible]

みて亭

みてはしめのうた　藤原定家

みてまゝ　八重二重　おもゝ　ものの　不知　ものゝ

二の白はしへすぐとしふ　祖　そへ　くんべし　をとゝ　ものの

白　ものゝ　ものする

藤佐源人　ふすゝ　ものゝ　作る　百　の　ふ　雨

まゝ　れつる　ものの　彩　猶　の　白　ものゝ　ふ　やゝ　ものゝ　入月　の　新

二の白　ぬ　白　の　ふ　ものゝ　ふ　ものゝ　祖　ものゝ　ものゝ　彩　猶　の　白

どゝ　ものゝ　ものゝ　ものする

離別亭

百　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　別　藤原定家

ふ　ものゝ　ふ　ものゝ　ふ　ものゝ　ふ　ものゝ　衣　いく　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ

羇旅亭

ものゝ　ものゝ　百　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　旅　の　うた

後宋

浦　つ　ゝ　ふ　波　の　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　波　の　ものゝ

ものゝ　うゝ　ものゝ　ふ　れ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ

ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ

拾遺愚問賢抄

あさ霧たつ野べの露が滝の音に声あく神ぞ渡らはしり

野べの露あくてこ孫あさと

恋歌二

歌しらず

藤原為隆

これもまた袖にぬるるたもとかな思ひそめしぬるるなみだの

打ちあひきくぬるるたもとかな人をまちたるうひまくらとて

第の時ぬるゆゑ思ひ

恋歌四

月前恋

藤原為隆

なぐさめ月やハ物を思ふこころ

新古今中

藤原為隆

いづくまで風をもせきとめましさ吉野の奥も春の夕ぐれ

おもかるるむとは花のうきをうらみてのがれいるそこ

てくよしみのおくハ世をうらうらのがれいるかなすれる

おもこゝろもなく花をもてられぬるうきはなれがてしに
づくふかのがれすなてうきことのあらんをみかさて
風をもなげかはまちしてうきあるものゆゑ
あくとうきをなげるに和歌浦の海人の
やとしたふ花やなくなのちをバ風のうきを恨て
いづくにかはなのがれをもとめもとし
述懐百首より 俊成卿
世中よをこそもたれ世思ひいる山のおくにかくれまくする
又帝のやゆゑ 俊成卿
あやまちなるまゝにおきこ

しの事あるをそ殿上のそうれをなる事を
をれをそ又乃そしれやよひのはらをちこち波ふ
陸奥しまをもとめてしたゆ雑意をゆ詠ふ
中納言しるをへをへ作りをれ
あしの中ゆ乃雲為ますひし家をそ歌をそ人や為をつべき
初二句をそ宮をもの殿をそうれをそ事をあり
をあしをそ
ものこゝろをもしるをはのをあるをふをこと
みるをふかるをそいをふぞやををそ人をそうれる
をとをんをそ雲為といへるをつぐなるを

○天は八十四歩を打流下の中

乃甚さえぶくこれもなやさつふきてくゝ藏ぞ
をぐつれをぼきぐだぶふをぼきをぐ者ぶ藏ぶ
くゝをぐをぐぶをしやるも。

寛政三年四月十三日持夜書をへぬ

書肆

名古屋本町通七丁目
永樂屋東四郎藏板

古事記傳

附三大考目録類字　四十八冊　薄用摺　十五冊

本文古事記を總三卷にして上卷は天地の初發より鵜草葺不合命の御代に至るまでを記し神武天皇より推古天皇まで中卷は仁德天皇まで下卷は其後を所謂神代の事を

帝国図書館蔵

れを知ひ高く志を立て妨なの人の曾有の學問を凝し三十餘年に工夫成就したる一世の大著述なり普く古記に傳たるハ體裁同じかゝる事を彼の漢書春秋等に傳へたりしも名ら普通の注解と云へるを意也

○古傳を考へたるなる辯ず載て書紀に後世に傳るやうに意也

○國史の首に日本書紀とあらはし聖德太子の撰たまへるを上代の簡書を編纂し先卷首に記典等に總論諸

古事記

二

人おかせて帝紀及び上古諸の事を記定しめ給ふと云へり傳へらるに

元明天皇和銅四年九月十八日太朝臣安万侯に詔して此古事記を撰録し

終て貢進と本書の序文に見ゆ日本紀に養老

四年小成より續日本紀に記されたれど此記より八

年むくれさて此古事記ハ字の文とかざらぬ

ら古語とむ孫とし古の實れおてさを先くしと動た

るふそのおろより漢學さりに行くれて何事とかな

たのさ四のをうらやを古のみ日本紀ハ漢の國史に倣

さきバそれと悅び此の記のするなるると見てハ正しき

國史のさまるらぞとてとらそるり世の人彼とのそれ

ふしみ用ひ此記ハ名とだかるぬも多し。以上取詮又田

事紀の偽書にるもを辯ぜられそりその大畧に今

世ふある旧事本紀十卷聖德太子の撰ゐし真の紀か

取合せ又往々古語拾遺をしも取り但し三の卷の饒

速日命の天より降り坐時の支と五れ卷尾張連物部連

の世次と十の巻國造本紀ハ他ふ古書ありて取るべき物なるべし。以上取捨おもきらの論あきば二書ハとられざりしなり○或人古事記成て後八年を経同天皇舎人皇子ふ日本紀と撰びしめ給ひしハ此記あやまりの故の疑問ふ答られさる論弁ハ本書ふ委し○古事記と異本ある支世上流布の本二部ありて一ッハ寛永板に文字誤脱訓もすべていとそろしく訓ハ直されたれど弊度會延佳神主の鼇頭本誤脱を訂し訓ハ更ふ古書と證として厳密ふ考覈しこれを施さたれでよひ人此訓を誦習むべきく見覚えさて傳ハよく傍假字と年紀ハ伴の信友主の鈴屋翁畧年譜に明和元年○此傳著述の三十五歳

にて古事記傳の稿を始め天明六年五十七歳の時上巻の傳既ふ成しづからふ彫太さとかきうの寛政の始刻成といふのちしに十寛政四年六十三歳中巻ふ傳成又さ年ふ同十年六十九歳ふして下巻ハ傳成辛酉刻成

後文政五年に至て全部刻成

此書ハ古訓を解し古意とときとさとたろハなとりふて

をべていさくらのとくもしくつまびらかにあげ

つろひて古學の趣まもく後ハ世の緒れさまでつきま

へおうれたる書紀とはじ先とろろの古書ハ

さらふといもず又後ハ哥書物語書を見るにもわきま

ふ屋きを文おほけをバかへをくよみ心得おくべき書な

ろよし附巻目録凡例の末ふ子息春庭主記し置れしより

一巻 古記典等捻論 書紀の論 舊事紀と書の論

記題号の事 諸本又注釈ハ事 文體の事

假字の事 訓法の事

直毘霊 七十二丁オモテより九十八丁ニハウラて一巻終

此書ハ道といふとれ論ありと注してをが神道の本意と本

文ふ述自注ぜられたる古人ふ發の明弁にて當時より後々

まで諸家ふおいて議論少〻さまどそハ皆取ふもたらぬ泥
勢にて此書ハしも学者必聞記して常ふ口熟後世ど教導
向専要の文章ろり

二巻　安万侶奏上の序文と載てくしく解る次ふ系図 二十五丁ゑ古事記ゥ
　　ぎりの神人の系譜ふして間論注を加ふ
三巻　天地の初發の段 一丁オ　神代ど世の段 三十三丁
四巻　おのごろ島の段 一丁　みとのまぐゝひの段 十四丁
五巻　大八島成出の段 一丁　諸神等生坐の段 三十丁
　　伊邪那岐命御石隠の段 五十丁　迦具土神被殺の段 六十九丁
六巻　夜見の段 一丁　御身滌の段 三十七丁
七巻　三柱貴御子御事依の段 一丁　須佐之男命御啼いさちの段 十五丁
　　御宇氣比の段 三十九丁　男御子女御子御詔別の段 五十八丁
八巻　須佐之男命御荒備の段 一丁　天石屋戸の段 十七丁
九巻　須佐之男命御被避の段 二丁　心俣とろちの段 十三丁
　　須賀宮の段 三十八丁　大國主神御祖の段 四十九丁
十巻　稲羽素兎の段 一丁　手間山の段 十四丁　根堅洲國の段 四丁
十一巻　八千矛神御妻問の段 一丁　うきゆひの段 二十八丁
　　大國主神御末神等の段 五十六丁

十二巻　少名毘古那神の段 一丁　幸魂奇魂の段 十六丁
　　大年神羽山戸神御子等の段 二十八丁
十三巻　國平御議の段 一丁　天若日子の段 十五丁
十四巻　大國主神國避の段
十五巻　御孫命御天降の段 一丁　日向宮御鎮座の段 六十五丁
十六巻　猨女君の段 一丁　猨田毘古神阿射加の段 八丁
　　大山津見神詔の段　木花佐久夜毘賣御子産の段 三十七丁
十七巻　御幸易の段 一丁　綿津見宮の段 九丁
　　火照命奉仕の段 六十三丁　鵜羽産屋の段 六十一丁
　　鵜草葺不合命御子等の段 八十九丁
十八巻　十九巻　廿巻　白檮原宮の段 神武
廿一巻　高岡宮の段 綏靖 一丁　浮穴宮の段 安寧 七丁
　　境岡宮の段 懿徳 七丁　掖上宮の段 孝昭 十七丁
廿二巻　秋津島宮の段 孝安 三十四丁　黒田宮の段 孝霊 三十八丁
廿三巻　境原宮の段 孝元 一丁　伊邪河宮の段 開化 四十一丁
　　水垣宮の段 崇神
廿四巻　廿五巻　玉垣宮の段 垂仁
廿六巻　廿七巻　廿八巻　日代宮の段 景行

廿九巻　日代宮の段　一丁　志賀宮の段　成務　四十七丁
三十巻　三十一巻　訶志比宮の段　仲哀
三十二巻　三十三巻　三十四巻　明宮の段　應神
三十五巻　三十六巻　三十七巻　高津宮の段　仁德
三十八巻　若櫻宮の段　履中　一丁　多治比宮の段　反正　三十七丁
三十九巻　遠飛鳥宮の段　允恭
四十巻　穴穗宮の段　安康
四十一巻　四十二巻　朝倉宮の段　雄略
四十三巻　甕栗宮の段　清寧　一丁　近飛鳥宮の段　顯宗　四十八丁
廣高宮の段　仁賢　七十二丁　列木宮の段　武烈　七十六丁
四十四巻　玉穗宮の段　繼體　一丁　金箸宮の段　安閑　二十三丁
檜垣宮の段　宣化　廿六丁　師木島宮の段　欽明　三十四丁
他田宮の段　敏達　四十八丁　池邊宮の段　用明　六十丁
倉椅宮の段　崇峻　六十八丁　小治田宮の段　推古　七十丁

板元　尾州名古屋本町通七丁目
永樂屋東四郎

萬葉集畧解　三十二巻　薄用摺　十巻

此萬葉集は上古雄畧天皇の御代あるより後は寧樂朝にいたる迄上天引より下廣人に至まで長哥短哥雜躰何とれも種々の哥を廣大に集たる所謂古躰の哥集の大成なるものなり○萬葉とは書を數の多かるを言なれども或人は萬葉考に萬を數の多かるを言なれども或人は萬葉を荷田大人は東人のいふ世の意なるべしとあり字を借しのみ也葉を哥ふよせぞなるべしとあり字を借しのみ也葉を集あるを略して○集たる人は是も同書に高野の御時孝謙天皇橘諸兄の大臣撰したまへるを世繼が物語に見えされば高野の御時より前聖武天皇の御代にあらんとおもふ事あるを諸兄の大臣の撰ぞちふも古へよりいひつたへしかく實にさあらんは普通の說なれども孝謙天皇の勅を奉て撰たまへるを諸兄公薨逝の後に哥ばかりさあれを或は家持卿の增加あるべしとも又諸兄公のみあらんとも種々先達の說ありれど加茂翁は真の萬葉集といふを今のる二

十巻の内ふ六巻うつて其餘も万葉といふものゝ撰ぶ治定せらるゝ○惣哥員の事八雲の御抄に四千三百十五首袋草紙ふ四千三百十首や○加茂翁新に改めらるゝ巻次

一の巻二の巻と三の巻ハ今のゞとし今の十三巻と四の巻五の巻ハ今の十四の巻古き東哥

十一巻と十二巻ハ今の十六の巻ハ新羅の御使の哥と中臣宅守茅渟王大伴家持も入る家

十二巻と十三巻ハ今の十七の巻ハ前後由縁ある哥ふて中

大夫の家集今の七の巻を結びたるなるべし今の五の巻ハ哥も聊古く集ぶ山上憶良

他しかりて此二巻をうさむやし誰と一人の集めさ

上の娘子の贈和今の十五の巻ハ戯笑躰とのせさるら中に河村王大伴家持も入る家

持家集の中ふもやあらむ今の三巻四六八九十七十八

十九世ハ家持の家集ふ加茂翁

猶巻の次と微細の考今の巻とし今の十八の巻と十九の巻とし今の九と十の巻とし今の七を八の

十五と十一の巻と九の巻とし今の八と十二とし今の四と十三

とし今の三と十四とし今の六と十五とし十六ハ今の

ゞとし十七以下今と同じかくあれゞ此畧解にハ今の教

の次ふるせるも年久しき事ハ姑今の本のまゝつ

いつるよし九例ふ考るに○此注解ハ万葉考同別記の

説によて加茂の翁の家ふつゞけつらひしを

もやゝして翁没後ふも女達論じあうて考得そりと思ふ

ひもと人々のいひ出せるに翁の考もらされし思ふ

とハあげつしきも九例ふい〜て又契沖法師東万呂

本居の先生の説とも来録し千蔭自己の新説もそ

くれらば○枕詞の注ハ短辞考にゆづりて畧しそれ

ふもそるも附録ふ注そるよし也○異教校合ふ用い

たるし

○古本 東丸の本えらも一本

人のもてる元暦元奥書校合せし

○活字本 一本のつねの活本

○拾穂本 季吟古の校合せし

外ふ古業畧要集 東茂翁考の代げ匠記

○官本 仰業抄かる

古業畧類聚抄 春日若宮神主の先祖

江田茂世恭長の転写

又此畧解作者橘千蔭と助けなる平春海源朝道別

源朝弦の三人なりけるよし

○二十巻目巻

末ふ此万葉集畧解をべて三十巻寛政三年二月十日よ
り筆を起し同八年八月十七日ふ稿成きをさてあは
ゐび考へ正して同十二年正月十日まで二ふみづうら
書畢ぬ楠千蔭とありて影下も一筆ふて終十年の間に
大成せるもの也巻首ふ寛政三年三月廿五日自序うり
次ふ凡例うり○此書畧解し題すれやも諸本と比校し
訓を訂正もたる事叮嚀文覆極て勤多るものふして諸
注解の謬誤と改めもふも初心の輩ふも會得し易く平
假字もて取近き言語つきに書綴るとは〳〵やも野鄙な
る事れく大簡ならず仙覚の抄ハ古風ふして哥を解く
ふ益ぬく圓珠菴の代匠記ハ精密ふ過て讀て
ふも暇入り其餘諸名家の注釋少からねや此ふ得れで
彼ふ失ひ此畧解のごく全備しさるものと見ば

板元
尾州名古屋本町通七丁目
永樂屋東四郎

三大考

一冊

鈴屋翁門人服部中庸著○天地國土のいかなる其生出たる初發より今の如成堅までの趣を神代固有の傳ふもさらひ深く考得て伝ふ新ふ十の図を設け委細に説明め古来の大疑を水解したる前人未発の卓論ち後ふ平田篤胤翁の著さもたる霊の御柱と云書も専此三大考ふ原きて述られつらむと覚ゆ抑三大とハ天地水火風を四大と称そるふ准へたるふもの地に泉とも云ふ月の三ふして仏書に地水火風ハ天地の異ふして漢儒の旧説とハ表裏せ仏説とハ佐後世に聞けるる西洋の測算ふよる如くれれど是便自然にきるべき神代の傳のもなかところひ○神代ふハ天地泉相互ふ来往したるものるを後ふ此三大魂ふらでも通達なてかき更由みども此考を熟覧も露不審きを更みし○本居先生の跋ふさやを深く物よくかむ跋る西の國々の人どりふ〳〵いまさえらむが〳〵出ざをし更をしめづらうりと考へ出たるかもく

もしくは考出あるうもかくてたゝ高天原も夜の食国をいぶうしきくまれくハうつびぬもゝゝと稱せもて古事記傳十七の巻の次ふ附らる

神代正語　三冊

書名かみよのまさたとや訓ゑし○上代の支ハ上代の語も て語傳けれぞそれ記せる書ハ皆漢文なれど文字遣ふ拘らひて古言と失ひ古意と知ふ害多し古事記ハ古言を傳ふるを旨とせしもたもバ文字の儀ふ序假字つけて皆古語に訓返されつもど讀者を猶文字ふ目の つきて訓のおろそかふみなぬべきをうきひ神代の巻だふ殘らば假字ふ書なし初心の輩ふよみ習をせんと むもとひみから明頃経しを門人横井千秋主おみし心ふ ひ發して此著述を請きけをバ翁甚悦ひ寛政元年 四月五日のかとにかき終られたるよし序文ぬと巻首 よも見えたて其躰裁ハ神代の巻と古事記と書紀とを 合せて支のおもふきいやしも異ならぬハ古事記よよ

ていさうのたゞひとを二典別ラハあげを同支の異なるを外ふ向げて又もかくもあてとちるし古事記 よもれたる支を書紀を取て古語ふうへしてあげとの 二典ふハかれさる支の異古書ふみえをるとも一つ二 つ向げらもたり神名地名をべて物名を文字ふてたる し一々訓注を附清濁のさだめ厳重なて○初學の輩 を先此正語とよみ吟熟て古事記傳をもよむ時を學業 の本末ふ多しく軽卒のうやまちぬうらんうし○遠江 人栗田土満序横井千秋主駿あり

出雲國造神壽後釋　二冊

往昔年々二月三月又正月四月さらもの頃出雲國造朝廷ふ参て物献りて神壽といふことを奏とと有其儀式 うてそめの支ふうらばりとの神壽の詞を延喜式八巻祝 詞の部ふ載られて詞を調といと古く他書ふなき神代 の傳も殘りいとしく先でたき古文章なれバ加茂真淵

翁の祝詞考ふ深くめでまをしてぞ祝詞をもじめ万の文をもかきつべけもとをもされてよ
ア世の人うりうやうの名文ゆるをを知をめ本居翁をいよ〳〵尊ぶれて此書の校ふ古風の哥をもら
されさア○後釋とも祝詞考の後の注釋といふ支ふて祝詞考の文を遂あげ頭書とをもさずうつし出し次
小考の誤りを理ア自己發明の新説を微細ふ記さる○
寛政五年九月出雲國造俊秀主序ゆり同八年刻成

御遷幸長歌

折本一冊

天明八年正月晦日内裡炎上寛政二年新内裡造營成り
て十一月廿二日遷幸まし因れ翁今年六十一歳都ふ上
ア御うつろひの大御よをひを見奉アよまれたる哥共
及哥二首なり御行列のミわアさは眼前ふ見るごとく
よみなしたる古風の長篇にして長哥よむ手本ゆれと
まさるハゆらじ大舘高門御遷幸をえ拜まぬ田舍人の
たゆよとて木に彫しむ

三代調和歌類題

六冊

三代とハ古今集後撰集拾遺集れ三代ふて大うの哥同じ
風調の哥ゆアて詞も調もゆうぬ支るく哥の意雄々しくも
やさしくもそべて花も実もそれをてこれを大空の
月ふあと〳〵代々にくもらぬ詞の鏡ゆもハ定家卿の詠
哥大概よを詞ハ三代集といづ重からばしハのたまひ
かきてたアさもバ此類題ハ此三代の作者の哥またよ
み人しらもぬも三代の作者の吟つきえるきハり
さず三代集くおとよりふて世々の勅撰古今六帖菅家
万葉哥仙家集夫木鈔ゆるとよとぬき出しえらひ集め哥
ふ随て題を附もども原書の詞書ハ省ゆず四季恋雑に
類題して初学の手本ゆるしこもハ三河の國吉田
の城ゆる岩上氏の家ゆ自登波子といふ哥よみ文かき
がえらみふて女ふハ久づらしき支ゆ但しくそぎてを
めたゆハ夏目甕營定めか祢つる支ゆひあくせたる
ゆ中山美石實相院の古道ゆるどのよし文政四年六月う
れゆる本居大平主の序文ふあア今や都も鄙も哥道盛

小行をて初学の見るべき為として類題のあまた出来き
ど大りさえらミ躾よて哥数のミ多きも風躰のようら
ぬまさ字誤などまじてい害ふこそなれ證例ふもひ
かもず座右ふかきても益ある支るし抑哥も詞やさし
く心をれかに品高くこそよむものるとそも人ふま
さらむし新奇をのミ好むときハ姿も詞もふざまも異
様ふのみなて行てこもハ邪路ふもちへといふものみ
れをとすらくと此ありぬ支るき三代調とよみそらん
じて詠哥修行あるべきしもと三代調類題とのミある
を和哥のもじ入たるを見易らんとてのてざなり
巻尾ゑ文政五年春松齋藤井高尚ぬし跋あて

江戸職人歌合　二冊

東北院職人哥合鶴岡放生會職人哥合などの風ふ倣ひ
江戸當世の職人をあつめてもらが七月十日浅草の観
音堂ふ通夜し月を恋れ題もて哥よみさるを左右につ
ひ名を自ら哥よミ判者ふもるて勝負をつけたる

やうにつくるふしたる戯筆ふて難陳もあり哥も例の
ぢく俗談をまじへ為るが今の狂哥者流のえせ哥ゑも
あらを上手の口つきいちがるく面も加へたるふその
さま見るがをしい〳〵興深き哥合なて

一番左名主　右大屋
三番左八卦見　右人相見
五番左青物賣　右魚賣
七番左馬方　右車引
九番左女郎　右藝者
十一番左鐵多　右乞食
十三番左猪牙舟こき　右四ッ手駕かき
十五番左そむや　右湯屋
十七番左酒屋　右飯屋
十九番左筆結　右経師
廿一番左畳刺　右石切
廿三番左付木賣　右箒賣
廿五番左念佛宗　右題目宗
○石原正明弟嶋周文化五年五月十五日伊豫國ふてか

二番左儒者　右医者
四番左いちと　右顔人
六番左虫賣　右笛賣
八番左呉服屋　右ふゝきや
十番左夜鷹　右船鑑頭
十二番左鳶者　右臥烟
十四番左覚兵衛獅子　右軽業
十六番左紙屋　右茶屋
十八番左みそ賣　右さる賣
廿番左屋根葺　右左官
廿二番左水くゝ〳〵や　右上巣子屋
廿四番左座頭　右山伏

ける序あてまさ正明の奥書ろて　右江戸職人哥合ハ
文化二年七月十日浅草寺ふ於てとも磯部千貝聞
書をる所なて奚遂さるふ依て傳写と聽さる池南搢紳
藤原春季図してとき賜ふ珍重こと予ゆ為此屋
封をべきれ世も猶四山賊あて日織人をして文化小澄
浴せしむ堯舜の民ふ勝きるものろ重て弥重

玉勝間　附目録一巻　十五冊

是ハ本居翁の随筆ふして若年より讀書の度抄録あて
てやてすつべきふもからぬ支を始事に觸て見聞ける
しこやの沙汰道にうれる教のこふもあらび花紅葉
ふよれる風流今昔都鄙よつさへたる土俗の習何と定
まりたなるとめく年頃筆のまふ書をさきもたるが
尋常の人けよしるしお中をとたがひ古学者の為よな
録ふも換ふさき重宝となりれ。尾崎雅嘉云書體全く
随筆ふして古書とあさ有ふ記録の考多し中ふも記
ニ。文化九年正月植松有信跋ト云ヒ畢此ふこて中

ものうさらをつくろはすうきやり給へるハ今も吟づ
から物ゆらたまふやうふて此巻をくるかへし見る
たびふ有信等をのうみ大人の御許ふさぶらひていい
きうせすしふ聞ふしちしてニ。初若菜ふて巻下ろて
の巻まで翁の彫ふて以下ハ翁没後他筆ふて清書を初編も寛政六年刊行の
ち三巻づ彫刻し目録一冊とそへて十五巻五度ふし
て成就をるよし孫本居萬ア呂目録の後ふ記さる彼
目録を十四巻中の件々ア附とくをしくして見る人の
便宜とし
。詞草ハ引続ふ玉がつまはみてあ〳〵ろを野の
へのそさびふと一ぢの巻の前ふ記てやりて書名とせら〳〵
一の巻　初若菜　六十条　二の巻　櫻の落葉　四十八条　三の巻　たちばな　四十六条
四の巻　さすも草　八十条　五の巻　枯野の草　四十七条　六の巻　あや　六十七条
七の巻　ふぢなみ　六十五条　八の巻　紅の下葉　百十八条　九の巻　花乃雪　六十二条
十の巻　山背　三九条　十一の巻　さゝなみ　七十一条　十二の巻　山ふき　八十九条
十三の巻　おすひ草　百十条　十四の巻　つゝ椿　九十二条　十五の巻　惣目録

9112
3
07

發行書肆

江戸日本橋通一丁目　須原屋茂兵衛
同　日本橋通二丁目　須原屋新兵衛
同　淺草茅町二丁目　須原屋伊八
同　日本橋通二丁目　山城屋佐兵衛
同　芝神明前　岡田屋嘉七
同　両國横山町三丁目　和泉屋金右衛門
同　芝神明前　和泉屋吉兵衛
大坂心齋橋通北久太郎町　河内屋喜兵衛
同　心齋橋通安土町　河内屋和助
同　心齋橋通博勞町　河内屋茂兵衛
同　心齋橋通安堂寺町　秋田屋太右衛門
京都獄屋町通姉小路上ル　俵屋清兵衛
尾州名古屋本町通七丁目　永樂屋東四郎